

# 王辰爾一族の名

中 西 康 裕

## はじめに

日本最古の墓誌と言われる「船王後墓誌」（以下、「墓誌」とする）は、渡来人として著名な王辰爾一族の系譜を伝えるものである。ただし、「墓誌」の製作年代をはじめ、内容にもいくつかの解明すべき事柄があるように思われる。小稿では「墓誌」を中心に検討を進め、王辰爾についての考察を行いたい。なお、小稿では音読表記が必要な場合にはカタカナで記した。

## 一 王辰爾一族の系譜

まず、「墓誌」の全文を掲げておく。

史料① 「船王後墓誌」（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編『日本古代の墓誌』、同朋舎、一九七九年）  
（表）

惟船氏故 王後首者是船氏中租 王智仁首兒 那浦故

首之子也生於乎娑陁宮治天下 天皇之世奉仕於等由

羅宮 治天下 天皇之朝至於阿須迦宮治天下 天皇之

朝 天皇照見知其才異仕有功勳 勅賜官位大仁品為第

(裏)

三殞亡於阿須迦 天皇之末歲次辛丑十二月三日庚寅故

戊辰年十二月殯葬於松岳山上共婦 安理故能刀自

同墓其大兄刀羅古首之墓並作墓也即為安保万

代之靈其牢固永劫之寶地也

これによれば、船王後は船氏の「中租(租であろう)」の「王智仁首」の孫で、父は「那浦故首」である。「乎娑陁宮治天下天皇」⇨敏達天皇の時に生まれ、「等由羅宮治天下天皇」⇨推古天皇の時(五九三〜六二八)に朝廷に仕えはじめ、「阿須迦宮治天下天皇」⇨舒明天皇の代(六二九〜六四一)にいたって「大仁」(冠位十二階の第三位)を賜り、「辛丑」年(舒明十三年、六四二年)の「十二月三日」に亡くなった。その後、「戊辰年」(天智七年、六六八年)十二月に夫人「安理故能刀自」とともに「松岳山上」に合葬し、「大兄」である「刀羅古首」の墓と並べて墓を作った。これによって、船氏の万代の霊を安んじて、壑域を永続的に確保する旨が記載されている。

六四一年に亡くなり二十七年後の六六八年に改葬、夫人と合葬され、それは「刀羅古」の墓と並び作られたことから、この「墓誌」の製作年代は六六八年を上限とすることが分かる。しかるに、これまでに指摘があるように、(1)「天皇」号の使用、(2)闕字礼の採用、(3)「官位」の語の使用などから、飛鳥浄御原令(六八九年)あるいは大宝令(七〇一年)以降の製作ではないかと言われている。一方では、表裏面への刻文や墓誌自体の縦横の比率などから八世紀初頭を下るものではないとされている(三)。

このうち(1)の天皇号の使用開始については近年遡らせる議論もあり、また(2)、(3)については渡来系氏族の墓誌であり、日本の律令や礼制に拘泥する必要はないようにも思われる。小稿では製作年代については一先ずおき、記載内容、特に人名について検討してみたい。

右に見たように、墓誌には「船王後」、「王智仁」、「那沛故」、「刀羅古」の船氏の人々の名前がある<sup>(2)</sup>。このうち、もつとも世代の古い「王智仁」については、『日本書紀』に名前が見える王辰爾のことであろう(後述)。

そこで、これらの人々を個別に検討する前に、王辰爾の一族の系譜について、諸史料をみておきたい。史料の成立順に取り上げる。まずは『日本書紀』からである。(〈内は割注〉)

史料② 『日本書紀』欽明十四年七月条

幸<sub>二</sub>樟勾宮<sub>一</sub>。蘇我大臣稻目宿祢奉<sub>レ</sub>勅遣<sub>二</sub>王辰爾<sub>一</sub>数<sub>レ</sub>録船賦<sub>一</sub>。即以<sub>二</sub>王辰爾<sub>一</sub>為<sub>二</sub>船長<sub>一</sub>。因賜<sub>レ</sub>姓為<sub>二</sub>船史<sub>一</sub>。今般連之先也。

史料③ 『日本書紀』欽明三十年正月条

詔曰。量置田部<sub>一</sub>其来尚矣。年甫十余、脱<sub>レ</sub>籍免<sub>レ</sub>課者衆。宜遣<sub>二</sub>胆津<sub>一</sub>〈胆津者。王辰爾之甥也。〉檢<sub>二</sub>定白猪田部<sub>一</sub>丁籍<sub>一</sub>。

史料④ 『日本書紀』欽明三十年四月条

胆津檢<sub>二</sub>閔白猪田部<sub>一</sub>丁者。依<sub>レ</sub>詔定<sub>レ</sub>籍。果成<sub>二</sub>田戸<sub>一</sub>。天皇嘉<sub>二</sub>胆津定<sub>レ</sub>籍之功<sub>一</sub>。賜<sub>レ</sub>姓為<sub>二</sub>白猪史<sub>一</sub>。尋拜<sub>二</sub>田令<sub>一</sub>。為<sub>二</sub>瑞子之副<sub>一</sub>。〈瑞子見<sub>レ</sub>上。〉

史料⑤ 『日本書紀』敏達三年(五七四)十月戊戌条

詔<sub>二</sub>船史王辰爾弟牛<sub>一</sub>。賜<sub>レ</sub>姓為<sub>二</sub>津史<sub>一</sub>。

史料②は王辰爾が船史を賜姓したこと、史料③と④は王辰爾の甥である胆津(イツ)が白猪の田部の籍(戸籍)であ

ろう) を作成した功績によって白猪史を賜姓したこと、史料⑤では、王辰爾の弟の牛が津史を賜姓したことが記されている。ここから、王辰爾の一族は、船、白猪、津の三つの氏族に分立したことが知られる。

『日本書紀』に続く国史『続日本紀』から二つの史料を引用しておく。

史料⑥ 『続日本紀』養老四年(七二〇) 四月壬戌条

改<sub>レ</sub>白猪史氏。賜<sub>レ</sub>葛井連姓。

史料⑦ 『続日本紀』延暦九年(七九〇) 七月辛巳条

左中弁正五位上兼木工頭百済王仁貞。治部少輔從五位下百済王元信。中衛少將從五位下百済王忠信。凶書頭從五位上兼東宮學士左兵衛佐伊予守津連真道等上<sub>レ</sub>表言。真道等本系出自<sub>レ</sub>百済国貴須王。(中略) 其後輕嶋豐明朝御宇応神天皇。命<sub>二</sub>上毛野氏遠祖荒田別<sub>一</sub>。使<sub>二</sub>於百済<sub>一</sub>。搜<sub>二</sub>聘有識者<sub>一</sub>。国主貴須王恭奉<sub>二</sub>使旨<sub>一</sub>。挾<sub>二</sub>採宗族<sub>一</sub>。遣<sub>二</sub>其孫辰孫王<sub>一</sub>(一名智宗王) 随<sub>レ</sub>使入朝。天皇嘉<sub>レ</sub>焉。特加<sub>二</sub>寵命<sub>一</sub>。以為<sub>二</sub>皇太子之師<sub>一</sub>矣。於<sub>レ</sub>是。始伝<sub>二</sub>書籍<sub>一</sub>。大闡<sub>二</sub>儒風<sub>一</sub>。文教之興。誠在<sub>二</sub>於此<sub>一</sub>。難波高津朝御宇仁德天皇。以<sub>二</sub>辰孫王長子太阿郎王<sub>一</sub>為<sub>二</sub>近侍<sub>一</sub>。太阿郎王子亥陽君。亥陽君子午定君。午定君生<sub>二</sub>三男<sub>一</sub>。長子味沙。仲子辰尔。季子麻呂。從<sub>レ</sub>此而別。始為<sub>二</sub>三姓<sub>一</sub>。各因<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>職。以命<sub>レ</sub>氏焉。葛井。船。津連等即是也。(中略) 斯並国史家牒。詳載<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>矣。(中略) 伏望。改<sub>二</sub>換連姓<sub>一</sub>。蒙<sub>二</sub>賜朝臣<sub>一</sub>。於<sub>レ</sub>是。勅<sub>レ</sub>因<sub>レ</sub>居賜<sub>二</sub>姓菅野朝臣<sub>一</sub>。

奈良時代に入って史料⑥は白猪史が葛井連に改姓した記事であり、史料⑦は三氏族の人々の中で当時最高位にあつた津真道が、百済王氏の承認を得て改姓を願ひ出て、津連から菅野朝臣となつた記事である。とりわけ、史料⑦には「国史」(ここでは『日本書紀』を指す)と「家牒」から自分たちの系譜について語っている。百済の貴須王が応神天皇の請により辰孫王(別名智宗王)を日本に遣わし大いに「儒風」をひらき「文教」をおこした。仁德天皇の時代には辰孫王の子太阿郎王が天皇の近侍となつた。太阿郎王の子が亥陽君で、さらにその子が午定君である。午定君には

三人の男子がおり、長男が味沙、真ん中が辰尔、末子が麻呂で、個々から分かれて三氏となったことが記されている。また、史料は引用しないが史料⑦の翌年延暦十年正月<sup>(3)</sup>には葛井氏と船氏から改姓が願い出られ、葛井連・船連を宿祢とカバネが改められ、また船連から宮原宿祢、津連から中科宿祢が賜姓された人々がいた。

史料②～⑥と史料⑦の整合性を図れば、次の三系統となろう。

王辰爾の兄味沙もしくは甥の胆津が白猪氏の祖であり、後に葛井氏となった。

王辰爾、表記としては辰尔もあり、船氏の祖となった。後に宮原氏となった。

王辰爾の弟で牛もしくは麻呂が、津氏の祖となった。後に菅野氏、中科氏となった。

と整理することが出来るが、「後に○○となった」と記しているが、すべての人々が改姓されたわけではなく、もとの葛井・船・津を名乗った人々もいた。

最後に、弘仁五年（八一四）に完成した古代氏族の系譜を集成した『新撰姓氏録』をあげる。

史料⑧ 『新撰姓氏録』右京諸蕃 百濟

菅野朝臣 出自百濟国都慕王十世孫貴首王也。

葛井宿祢 菅野朝臣同祖。塩君男味散君之後也。

宮原宿祢 菅野朝臣同祖。塩君男智仁君之後也。

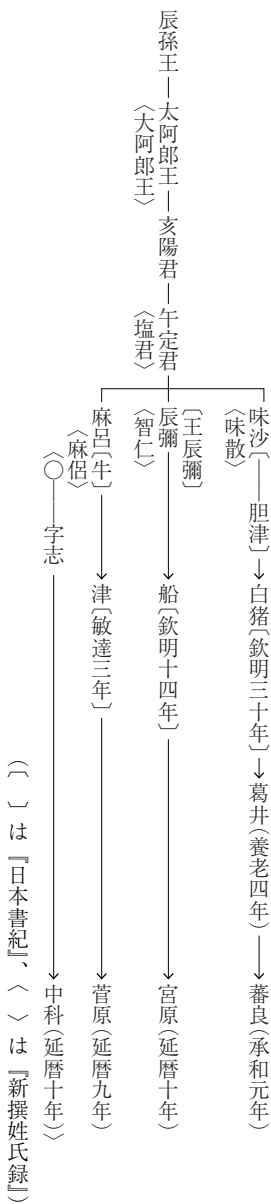
津宿祢 菅野朝臣同祖。塩君男麻侶君之後也。

中科宿祢 菅野朝臣同祖。塩君孫宇志之後也。

船連 菅野朝臣同祖。大阿郎王三世孫智仁君之後也。

史料⑦との比較では、「味沙」が「味散」、「麻呂」が「麻侶」との微かな表記の差があり、「午定君」が「塩君」となり、津氏から出た中科氏が「塩君孫宇志」と津氏より一世代新しい出自を言うなどの差異がある。「宇志」なら史

第1図 王辰爾略系図



料⑤『日本書紀』の「牛」と合致する。宮原宿祢と船連の条では「智仁君」と「辰尔」との差があるが、「智仁」は「墓誌」の表記と全く同じであることに気づくであろう。

上記の諸史料に見られる王辰爾一族の系譜を整理すると第1図のようになる。この系図を一見すると誰しもが、人名に動物名、しかも干支にちなむものが多いことに気づくであろう。上の世代から上げると、亥陽君、午定君、辰爾、牛がいる<sup>(4)</sup>。そうした目線で「墓誌」を見直すと、はたして「刀羅古」がいる。最後の「古」は「子」であろうから、トラ子となり「寅(虎)子」である。さすれば「船王後」や「那沛故」、そして「智仁」はいかにという問題となる。節を改めて論じたい。

二 船王後の名

「船王後」の名前については、既に読み物を出している<sup>(5)</sup>ので、まず史料を補って要点を記しておく。

史料①にある記載から人名としては「船王後」ということになり、「王後」が名前で「オウゴ」と読むのであろうが、これがいささか腑に落ちない。王辰爾は史料②にあるように欽明十四年に船史を賜姓しているが、史料⑤では「船史王辰爾」となっている。また敏達元年に高(句)麗の烏羽の上表文を読み解いた時<sup>(6)</sup>には「船史祖王辰爾」とある。普通に考えたと「船史辰爾」となるはずであるが、賜姓後も「王」を名乗っているのである。同様の例は、推古十六年に隋使裴世清が来朝して難波に至った時に「掌客」に任じられた「船史王平」がいる<sup>(7)</sup>。「王」字を通字とみると王後と王平は説明がつくが、王辰爾はそれでは説明がつかない。王辰爾の場合、「王」は姓で「辰爾」は名である。日本人の場合、人名は氏と名で構成されるが、渡来人の場合は氏ではなく姓と名で構成される。すなわち、王辰爾は氏+カバネの「船史」を賜った後も「王」姓を名乗っていた、併記していたのである。欽明天皇から「船史」を賜り、天皇から賜ったものであるためこれを冠し、なおかつ「王」姓も引き続き用いたのである。「船史王辰爾」は、氏+カバネ+姓+名で構成されていると判断できる。したがって、「船王後」もまた氏+姓+名であって、名としては「後」一字であると判断することが出来る<sup>(8)</sup>。

「墓誌」の人名は、「智仁」を除くと、「那沛故」「刀羅古」、あるいは「安理故能刀自」は漢字を一字一音で表記している。「那沛故」は次節で扱うので措くが、「刀羅古」は「トラコ」||「寅(虎)子」であり、「安理故能刀自」は「アリコノトジ」||「蟻子刀自」であろう。さすれば「後」も「ゴ」の音読漢字を別に当てるのであろう。前節の検討からして、それには「午」を充てるのが最適である。

こうした干支にちなんだ人名をつけるのは、誕生日と関連しているのではないかと仮定することは容易いことであろう<sup>(9)</sup>。午年生まれだから、名前に「午」をつけたということである。例えば、藤原宇合(ウマカイ)は霊龜二年(七二六)八月の遣唐副使任命が初見史料であるが、その時は「馬養」と書かれている。養老三三年正月に帰朝した折にも「馬養」であるが、同年七月には「宇合」となっており、これ以後は「宇合」が多く使われている。渡唐を期に

表記を変えたものと思われる。この藤原宇合が天平九年（七三七）に死亡するが、その年齢について『公卿補任』や『尊卑分脈』は四十四歳としている。ここから逆算すると、宇合は持統八年（六九四）の生まれで、干支では甲午となる。「馬養」の名は生まれ年の「午」に因んでいると判断できようであろう。

船王後が午年生まれだとすると、「墓誌」には敏達天皇の時に生まれたと記している。敏達天皇は『日本書紀』によれば在位十四年で、崩御年が五八五年。五七二年から五八五年までの在位期間の干支で午年は、五七四年甲午だけが該当する。船王後がこの年に生まれたとすると推古天皇の即位時には二十歳で出仕するに足る年齢となっている。「辛丑」年（舒明十三年）の死亡時には七十歳と当時としては高齢であったことになる<sup>80</sup>。

### 三 「那沛故」と「王智仁」

次に、船王後の父「那沛故」についてみてゆく。最後の「故」は「子」であるから、意味としては「那沛」である。「那」は「ナ」であろうし、「沛」は音が「ハイ」であるから「ハ」であろう。では「なは」とは何かである。これについて長年解けない難問であったが、日本語学の大鹿薫久先生から「なは」は「ナワ」で、「繩」のことであることをご教示いただいた。

それならば「繩子」であり、古代ではありそうな名前である。また、「繩」から忌み詞である「朽繩」「口繩」（クチナワ）が想起され、繩は「蛇」を意味すると考えられる。さすれば「那沛故」も巳年生まれを表しているのである。

こうした想定を確認するために、奈良時代の人名で「繩」をつく人物をみた。平安時代に入ると動物名が少なくなるため奈良時代に限定したが、以下の四名がいる（人名の読み方は慣例による）。



藤原繼繩（ツグタダ） 藤原乙繩（オトナワ・オトタダ） 藤原繩麻呂（ナワマロ・タダマロ） 藤原繩主（タダヌシ）

繼繩・乙繩（弟繩）・繩麻呂は南家豊成の息子たちで、第二子・第三子・第四子である。繼繩は延暦十五年に死亡した年に七十歳であった<sup>(14)</sup>ので、逆算すると神龜四年（七二七）の誕生である。この年は丁卯である。乙繩は天応元年（七八一）に死亡するが、年齢は不明である。繩麻呂は宝龜十年（七七九）に五十一歳で死亡した<sup>(15)</sup>から、生年は天平元年（七二九）で、この年の干支は己巳で巳年の生まれである。繩主は式家藏下麻呂の長子で弘仁八年の死亡時には五十八歳であり<sup>(16)</sup>、生年は天平宝字四年（七六〇）で干支は庚子である。乙繩の誕生年が不明であるが、兄が七二七年生まれ、弟が七二九年生まれであるから、乙繩の誕生年はその間の七二八年（神龜五年、戊辰）であろう。4人のうち巳年生まれば繩麻呂の一人である。「繩」字名と巳年生まれとは無関係のようにも思えるが、そうではない。豊成の三人の息子たちは年齢も近く、「繩」字が共通するが、兄二人が二文字目に「繩」を配しているのに対して、繩麻呂は一字目に「繩」字があるという違いがある。また、長子武良士（『尊卑分脈』では武良自）を含めた豊成の息子四人の中で、五位に叙爵されたのは最年少の繩麻呂が最も早く天平感宝元年（七四九）のことである<sup>(14)</sup>。藤原房前の娘を母とする繩麻呂は、母が路虫麻呂である兄たち（『尊卑分脈』を差し置いて豊成の嫡子として待遇されている。長子武良士<sup>(15)</sup>を除く三兄弟は、繩麻呂を起点に繼繩・乙繩（弟繩）と命名されたのではないだろうか。「繼」「弟」字は兄弟間の序列を物語っているように思われる。

やや遠回りな説明になったが、「那沛故」は「繩子」で、巳年の生まれであろうことを説いたが、次に「王智仁」について検討したい。

「王智仁」の名について検討する前に考えておきたいことがある。「墓誌」には「船氏中祖 王智仁首」とある<sup>(16)</sup>。このうち「祖」は「祖」であろうことに間違いはないが、それならば「中祖」とは何であろうか。普通、「中祖」は

「中興の祖」の意味だと説かれる<sup>10)</sup>が、閔晃氏は「三氏に分かれたうちの中の氏の祖だったことを指す」と述べられている<sup>11)</sup>。たしかに三氏のうち船氏は三兄弟の真ん中の「仲子」の系統ではあるが、三氏の中で最初に賜姓した<sup>12)</sup>成立した系統であるから「中の氏」という解釈はできない。それならば「中興の祖」が正しいのかと言われると、そうでもないように思われる。

「墓誌」の「王智仁」は、史料②③⑤の「王辰爾」や史料⑦の「辰尔」と同一人物と考えられるが、王辰爾が初めて船氏となったわけであるから、王辰爾は船氏の始祖であり、けっして中興の祖ではない。「中興の祖」との解釈では始祖が別になることになり、矛盾するように思われる。他に類例もなく推測の域をでないが、「中」を「中の」の意ではなく、「あたる」の意味に取り、「船氏の祖にあたる」と解釈すべきではないだろうか。一試案として提起しておきたい<sup>13)</sup>。

「墓誌」の「王智仁」ではなく、史料②③⑤の「王辰爾」、もしくは史料⑦の「辰尔」であれば辰年に関わる名前であることが即断できる。しかるに「智仁」は、呉音では「チニン」、漢音では「チジン」となり、漢字一字で一音を表す「墓誌」の人名表記では「チニ」ないしは「チジ」となり意味がとれない。また「辰爾」は、呉音「ジンニ」、漢音「シンジ」であるから、「仁」と「爾」は近いが、「智」と「辰」では相関性は乏しいように思われる。ここで想起されるのが、史料⑦において「辰孫王」の「一名智宗王」との割注である。「辰」と「智」が置き換わっているとも見える。強引ではあるが、この別名によって「智仁」も辰に関する意味を見いだすことができよう。

「墓誌」以外の人名についても見ておく。白猪（のち葛井）氏の祖として史料⑦では「味沙」、史料⑧では「味散」とあり、「味」が「ミ」であるから巳や未を想起することは出来るが人名としては「ミサ」となり、「牛」や「午」「寅」の動物名のみとは異なった原理に基づく命名となる。史料③④の「胆津」については、通常これは「イツ」と読まれ「イ」からは亥を想起することもあろうが、音読では「タンシン」となる。どうもこの父子(?)は干支に因

む動物名を命名した方式から外れているように思われる。それは、三氏の氏族名が「各因<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>職。以命<sub>レ</sub>氏焉」(史料⑦)とされているように、「船」と「津」はそれぞれの職に因んだ呼び名ではあるが、「白猪」は史料③④にあるように白猪屯倉に関連し地名に基づく命名である。史料③では胆津を王辰爾の甥としているが、血族と言うより擬制的な関係を想起するべきではないだろうか。

#### 四 辰孫王・王辰爾と王仁

史料⑦の津真道の上表文では、辰孫王の伝承が語られている。応神天皇の時に荒田別が百済に有識者を求めて使われ、百済の貴須王がそれに応じて、一族の辰孫王を日本に遣わした。応神はそれを喜び、皇太子の師として用い、これによってはじめて書籍が伝わり、儒風が開けた。次の仁徳天皇は辰孫王の長子太阿郎王を近侍としたという。

一方、同じ伝承は西文(文、書)氏の祖王仁の伝承として記紀に記されている。

史料⑨ 『古事記』 応神段

又科<sub>下</sub>賜百済国、若有<sub>二</sub>賢人<sub>一</sub>者貢上<sub>下</sub>。故、受<sub>レ</sub>命以是貢上人、名和邇吉師。即論語十卷、千字文一卷、并十一卷、付<sub>二</sub>是人<sub>一</sub>即貢進。(是和邇吉師者文首等祖。)

史料⑩ 『日本書紀』 応神十五年八月条

(上略) 阿直岐亦能読経典、即太子菟道稚郎子師焉。於是天皇問阿直岐曰、如勝<sub>レ</sub>汝博士亦有耶。对曰、有<sub>二</sub>王仁<sub>一</sub>者、是秀也。時遣<sub>二</sub>上毛野君祖荒田別、巫於百済<sub>一</sub>、仍徵<sub>二</sub>王仁<sub>一</sub>也。(下略)

史料⑪ 『日本書紀』 応神十六年二月条

王仁来之、則太子菟道稚郎子師之、習<sub>二</sub>諸典籍於王仁<sub>一</sub>、莫<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>通達<sub>一</sub>。故所<sub>レ</sub>謂王仁者、是書首等之始祖也。

右記した記紀に記された王仁の伝承と史料⑦の辰孫王の伝承は細部についても合致している。井上光貞氏<sup>20</sup>は辰孫王の伝承は王仁の伝承を假冒したものと評された。長らく、これが通説の位置にあった<sup>21</sup>が、山尾幸久氏<sup>22</sup>は辰孫王の伝承が七世紀前半までに成立し、七世紀末に力を得た西文氏が辰孫王の伝承を基に王仁の伝承が作られたと、正反対の論を上げられた。請田正幸氏<sup>23</sup>は二つの伝承のどちらが先かの議論ではなくフヒト集団の共通の始祖伝承とされた。また加藤謙吉氏<sup>24</sup>は二つの伝承を同一基盤に立つ伝承であるとした上で、辰孫王の伝承は始祖名を代えて主張したものであるとされている。

王仁の後裔氏族と王辰爾系三氏族は加藤氏が「野中古市人」とまとめられたように、互いに近接して居住し、氏族の性質上も近似している。これらの氏族の動向については、改めて述べる必要を感じるが、ここでは二点だけ指摘しておきたい。一つは、職掌が重なるとはいえ、両系統は競合関係にあるのではなく、協調関係にあったと考える。根拠としては、宝亀元年（七七〇）に葛井・船・津・文・武生・蔵の六氏二三〇人が称徳天皇に歌垣を共に供奉していること<sup>25</sup>である。普段からの交流があつてこそこのことであろう。また、これらの氏族の主要な居住地の灌漑には水路が必要であり<sup>26</sup>、その上流に文・蔵氏が位置し、葛井・船・津氏は中下流域に位置するのである。水の確保の点からこれらの氏族は協調関係にあったと見るべきであろう。第二には、氏族の勢力の消長についてである。文氏には文智徳が持統六年に直大弐（四位相当）を贈られ、文祢麻呂は慶雲四年（七〇七）に正四位上を贈られるなど高位に昇る人いるが、両名が高位を贈られたのは壬申の乱の功臣であつたからであり、両系統共に基本的には中下級官人を輩出する氏族である。

右のように考えるが、王仁の伝承と辰孫王・王辰爾の伝承について付言すると、これは『日本書紀』にまみ見られる同事重出であろうと判断している。文（書）氏と並んで渡来系の大族とされるものに東漢氏がある。『古事記』では東漢の祖阿知使主が応神朝に渡来し、『日本書紀』では同じく応神朝に阿知使主とその子の都加使主が来朝したこ

とになっているが、『日本書紀』には雄略天皇の時代に東漢直掬（ツカ）が出てくる。応神朝の来朝から雄略朝までということになると、都加使主が異常な長命となることから、その来朝は応神朝ではなく五世紀末の雄略朝とみる流れている。記紀では渡来時期をより古くに置くという作為である。

史料⑨では、王仁が日本に論語と千字文をもたらしたことになる。千字文の成立は六世紀に入ってからのことであり、千字文を出す以上は王仁の渡来はもつと後になる。

小論の視点からいえば、王仁と王辰爾の名前の近似性をあげておこう。先ほど述べたように、仁は「ニン」、「ジン」で、爾は「ニ」、「ジ」である。また、王仁の後裔である行基の「太僧正舍利瓶記」<sup>⑩</sup>にはその祖先を「百済王子王爾」としており、王仁を「王爾」と記しているのである。王仁と王辰爾を同一人物とみるのであるが、史料⑦で津真道が辰尔（王辰爾）の上に辰孫王の伝承を加えたのは、津氏のために辰孫王の伝承を作った、あるいは付会したというのではなく、『日本書紀』との整合性を図るためのものであったと考えたい。

## おわりに

小稿では「墓誌」の人名を手がかりに検討をはじめ、辰孫王・王辰爾の伝承と王仁の伝承に論を進めた。行論中にも述べたように、諸氏族の在りでの動向など論じ残した点が多いが、一先ず擱筆して諸賢のご叱正をお願いするところである。

### 注

- (1) 『日本古代の墓誌』解説（東野治之氏執筆）。
- (2) なお、夫人の「安理故能刀自」の名前もあるが、おそらく他氏族の出身であろうから取り扱わない。

- (3) 『続日本紀』延暦十年正月癸酉条。  
系譜は不明であるが『日本書紀』推古十七年(六〇九)四月条には船史龍が見える。船王後と同世代であるなら船王後の二歳上(辰年生まれ)の兄か、もしくは王辰爾そのものの可能性もある。
- (4) 拙稿「王辰爾の「氏」と「姓」」(『日本歴史』八七九、二〇二一年)。
- (5) 『日本書紀』敏達元年五月丙辰条。
- (6) 『日本書紀』推古十六年六月丙辰条。
- (7) 「王後」は(おうご)ではなく(おう・ご)と二区切りつけて読むべきなのだろう。
- (8) 千支に因んだ人名については、岸俊男「十二支と古代人名」(『日本古代籍帳の研究』所収、塙書房、一九七三年)がある。
- (9) 付言すると、「大兄刀羅古首」は船王後の長子で「寅子」であれば、五九四年甲寅生まれで、船王後二十一歳の時の子であろう。
- (10) 『日本後紀』延暦十五年七月乙巳条。
- (11) 『続日本紀』宝龜十年十二月丁酉条。
- (12) 『日本紀略』弘仁八年九月壬寅条。
- (13) 『続日本紀』天平感宝元年四月甲午朔条。長子の武良士が天平勝宝六年正月、第二子の継繩が天平宝字七年正月、第三子の乙繩は天平宝字八年十月である。継繩と乙繩の五位叙爵が遅れた理由として、父豊成が天平宝字元年の橘奈良麻呂の変に連坐したことによるものであろうが、これがなかったとしても弟繩麻呂にかなり遅れることになる。また繩麻呂は橘奈良麻呂の変の影響もなく仲麻呂政権下でも昇任を続けている。
- (14) 武良士は天平宝字三年十一月まで任官記事が見える。この時も従五位下で、以後『続日本紀』には見えない。『尊卑分脈』には豊成の子の「良因」に「或本武良自云々」とあり、出家したようである。
- (15) 「首」はカバネである。船氏のカバネは史で首ではない。カバネの問題はここでは措いておく。
- (16) 『日本古代の墓誌』解説(東野治之氏執筆)。
- (17) 関鬼「帰化人」(至文堂、一九六六年)。
- (18) 本文のように「船氏中祖」を「船氏の祖にあたる」と解釈したが、ここは「中」字がない「船氏祖」でも同じ意味でありそれで事足りているのである。あえて「中」字を入れた理由がない。試案とした次第である。
- (19)

- (20) 井上光貞「王仁の後裔氏族と其の仏教」(『日本古代思想史の研究』所収、一九八二年、岩波書店、初出は一九四三年)。  
 (21) 関晃注(18)も同様な考えである。  
 (22) 山尾幸久『日本古代王権形成史論』(一九八三年、岩波書店) 三三〇～三三三頁。  
 (23) 請田正幸「フヒト集団の一考察」(『古代史論集 上』所収、塙書房、一九八八年)。  
 (24) 加藤謙吉「野中古市人」の実像」(『大和政権とフミヒト制』所収、吉川弘文館、二〇〇二年、初出は一九九七年)。  
 (25) 『続日本紀』宝亀元年三月辛卯条。  
 (26) 拙稿「古代河内における開発の一樣相」(『古代文化』四四〇—一〇、一九九二年)。  
 (27) 『日本古代の墓誌』(同朋舎、一九七九年)

〔追記〕

本稿が曲がりなりに世に出た理由は、元文学部教授大鹿薫久先生(日本語学)から「那沛故」の読み方をご教示いただいたことによる。それが何時のことであったかは記憶に定かではないが、数年前のことである。先生に「なは」って何ですかと伺うと、「ナワだよ」、「縄でよい」と即答された。長年、これに引っかかって前に進めなかった私にとっては、まさに目から鱗であった。学恩に厚く感謝いたします。

大鹿先生にはご在職中に親しくさせていただき、折に触れて真面目に世の中のこと、大学のことを話し、また冗談を言い合っ  
 ては楽しい時間を過ごさせていただいた。時にはこのように学問上のご教示を受けたこともあった。大鹿先生がご退職から一年  
 余りで急逝されたことは痛恨の極みであった。

大鹿薫久先生との思い出は終生忘れることはありません。

——文学部教授——